（昭和37年3月12日
第三種郵便物認可）

平成31年4月10日

（第690号）

国民同胞

発行所
公益社団法人　国民文化研究会
（九州←→東京←→全国）
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替　00170-1-60507
電話　03-5468-6230
ＦＡＸ　03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料　年間2000円

# 日本人として、東洋紡の社員として

## ―タイ駐在、四年半の経験から―

庭本秀一郎

先頃、本会の合宿教室（平成二十年の第五十三回、於・伊勢市）への参加経験をお持ちの摂南大学の牧美喜男客員教授から、「現在、自分が担当してゐる『現代ビジネス論』講座に出講して、タイ駐在時の経験を学生に話して欲しい」との依頼を受けた。そこで、「私たち、日本人の心の奥底に存する企業観・倫理観や労働観について再検討し、グローバル化、価値観の多様化が進展する中、将来のわが国のビジネスの在り方について、皆さんと一緒に考える」といふシラバス（授業計画）に沿って、タイ駐在時に私が大切にしてゐたことを三つの切り口で話した。

第一は、「任地の偉人を尊敬する」といふことである。この点は拙稿「故・プミポン国王陛下とタイ国民の絆」（本紙の平成二十九年四・五月号）にも書いたので詳細は省略するが、タイ国民のために生涯を捧げられて、タイ国民が「世界一の王様」と誇るプミポン前国王陛下を尊敬できたことで、タイの風土に相応しいリーダーシップのあり方を学び、タイ人社員と共感し合って、彼らを信じたいと思ふ気持ちが強くなった。自づと謙虚になったのだと思ふが仕事が進めやすくなった。ことに既存の仕組みでは解決できない問題が起ったとき、自分の時間と労力を惜しみなく使って、状況を（彼らの思ひも含め）よく見聞きして理解し、問題の解決に取り組んだ。その後も彼らが自律的に事に当れるるやうに、必要な材料を提供して一緒に新たな仕組みを作り上げるやうに努めた。かうしたことは、前国王陛下のご事跡から学んだことであった。

第二は、「企業理念を体現する」といふことである。東洋紡の企業理念は、創業者渋澤栄一が座右の銘としてゐたとされる「順理則裕（理に順へば則ち裕なり）」である。私は、この言葉を「裕」に成らない時は「理」から離れてしまってゐるのではないかと自問自答し、絶えず自分の行動を見直せといふ厳しい言葉であると受け止めて、「理」を論理（to think WHY）、合理（to eliminate waste）、倫理（to be good for others）の三つの分りやすい言葉に落とし込んで繰り返し伝へ、reasonable（順理的）を褒め言葉として定着させようとした。果して、部下の方からI don't think you're reasonable と反論されて、私自身に新たな気づきがあって、考へを改めさせられることもあった。さうしたとき、痛く気持ち良い感じを覚えた。理念が定着し始めたことを感じた瞬間であった。

第三は、「和を以て貴しと為す」である。聖徳太子が「上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、即ち事理自ら通ふ。何事か成らざらん」と仰ったことは、東洋紡にあっては、「上司が柔らかい心で部下に接し、部下は上司を慕ふ、和やかな雰囲気の中で、徹底的に議論し、『順理』を追求する組織風土を作ること」と理解して対話を続けた。これは労力のかかることであったが、ひとたび通じ合ひ信頼が生れれば、組織力が発揮されることを実感した。

これら三つのことは、駐在当初から強く意識してゐたわけではなく、試行錯誤の中で、偉人の言葉を頼りに、自問自答を繰り返す中で納得していったものである。

天皇陛下は二月の御在位三十年記念式典で「島国として比較的恵まれた形で独自の文化を育ててきた我が国も、今、グローバル化する世界の中で、更に外に向かって開かれ、その中で叡智を持って自らの立場を確立し、誠意を持って他国との関係を構築していくことが求められているのではないかと思います」と仰せられた（**編註**・四頁に全文謹載）。このお言葉を耳にして、平成二十九年三月、天皇皇后両陛下が故プミポン前国王陛下ご弔問のため厳しいご日程を割いてタイにお越しになったことが、改めて深い感謝の念と共に偲ばれた。陛下のお言葉から、私のタイでの仕事は、プミポン前国王陛下、創業者渋澤栄一、そして聖徳太子のそれぞれが示された叡智の恩恵の上にあってのものだったと気づかされた。

今回の出講は四年半に亘るタイ駐在生活を振り返る良い切っ掛けともなった。かうした機会を頂いた牧客員教授に感謝申し上げたい。

（東洋紡（株））